本を選ぶ

NO.446 2022年（令和４年）7月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒114-0002 東京都北区王子4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぽわん>アルメニア・ペーパー

●鳥の目　８８（最終回）

ろん・ぽわん

アルメニア・ペーパー

毎朝出かける前に楽しんでいる多和田葉子の新聞連載小説「白鶴亮翅（はっかくりょうし）」は、さほどの筋立てもなく進行するのは相変わらずだが、ふらりと繰り出される巧みな比喩と言い回しの妙には都度感心する。主人公の美砂が、長い旅に出てしまった隣人Mさんにどうしても尋ねたい用件があって選んだ手段がメールではなく「手紙という古風なトンネル」。いつも通る団地の中の道を歩きながら、こうした穏やかな展開の一節を思い出しては、何故か愉快な気持ちになる。もちろん、作中の美砂には目の前の出来事と過去が混じり合い、それなりに心境の起伏が生じている様子だけれど。

ふと街路樹に目をやるとぽってりとした蕾をたくさんつけているのに気がついた。知らない樹木だ。近寄ってスマートフォンをかざし、葉叢と蕾の写真を撮った。数日後、人に教えてもらった検索法を試してみた。「Google レンズで検索」というメニューを選ぶ。驚いた。即座にそれとおぼしき樹木を出してくれるのだ。Google のサイトには「写真の被写体を認識して得られた情報を使って、関連する検索結果をウェブから見つけます」とある。あまた存在するウェブ上の画像データと比較同定して近似の有力候補を出してくれるサービスらしい。これが画像認識に関する最新のＡＩ技術というものか。

提示された検索結果は、ハクウンボク（白雲木）。よくよく見てみれば何と安息香のとれるエゴノキ科の仲間だという。葉も花も大ぶりで、安息香がとれるわけではないものの、花が咲けば甘く香るという。バッグから手持ちのアルメニア・ペーパーを取り出して嗅いでみる。安息香特有の甘い匂いだ。

アルメニア・ペーパーとは、小さな短冊状の吸取紙のような特殊な紙に安息香とか没薬などの香り成分をしみこませたお香だ。フランスの Papier d'Arménie 社のパッケージでは 1885 年創業と謳っているので百年以上の歴史がある。化学者オーギュスト・ポンソが西アジアのアルメニアを旅した際、現地の人々がたしなむ香木の樹脂を加熱して焚く習慣に出会い、持ち帰った。それをもとにポンソは薬剤師のアンリ・リビエと共同でアルメニア・ペーパーとして製品化した、という歴史がサイトに紹介されている。（https://www.papierdarmenie.fr/lunivers/）世界最古の薬局と言われているイタリアのサンタ・マリア・ノベッラ社でも同じような製品が購入できる。

この短冊は、箪笥の抽出に潜ませるとか本に挟むなどの他に、小皿の上で蛇腹に折りそれを加熱して燻らせる使い方もある。室内に半日くらいは芳香がとどまり、また殺菌作用もあるそうだ。

Mさんからは１週間後に返信の手紙が届き、読み終わると「手紙は蝋燭の火が風に吹き消されるようにあっけなく終わった」と続く。（埜村 太郎）

鳥の目 88

――鳥の歌、昭和史断想――

為貞　貞人

昭和初期―ひと時の平穏

ぶつぽうそう御廟月夜に来てなけり靄のなかよりほがらかに鳴く　中村憲吉『軽雷集以後』昭和９年

この歌は昭和５年高野山で開かれた第六回アララギ安居会の折の作品と思われますが、「ぶっぽうそう」がコノハズクだと判明したのは昭和 10 年ですから、この時は謎を秘めた神秘の鳥でした。

中村憲吉は私と広島県北の同郷で、旧制三次中学の大先輩のため早くから関心をもった歌人です。島木赤彦との合著『馬鈴薯の花』の一首「雨の色に冴えひかりたる青葉路をつばめの腹のひるがえり見ゆ」に強く印象づけられた記憶があります。

亡くなる前年、昭和８年憲吉は療養先の尾道で、ヒクイナの戸をたたく声に深い郷愁を詠みました。

海辺にも水鶏のなきて日の暮はあはれなりけり梅雨に入るころ　『軽雷集以後』

昭和６年満州事変勃発しましたが、憲吉の歌からはその響きは聞かれません。旧制広島高校の学生時代憲吉に師事した近藤芳美は「晩年に到りついた作品の世界は、戦争と戦後とを経て来た私たちにとり、遠くかつ羨ましいものとも言える」（『日本詩人全集 11』新潮社）と書いています。

昭和９年６月２、３日富士山麓での中西伍堂呼びかけの「鳥巣見学会」には、北原白秋、窪田空穂、若山喜志子、半田良平の歌人が参加、ここでも日中戦争直前のひと時の平穏な時間が流れています。

朝山は風しげけれや夏鳥の百鳥のこゑの飛びみだれつつ　北原白秋「多摩」昭和 12 年

立枯れの老木の洞の小鳥の巣わが近づくに雛口あくる　窪田空穂　「郷愁」昭和 12 年

わが覗く巣箱のなかに孵りたる日雀の雛は七つ寄りあふ　半田良平　『旦暮』昭和９年

しかし半田良平の次の歌からは心なしか不確定な時代の到来が感じられます。

行々子は堤を越えて畑なかの榛に来てまで啼くぞかしまし　『東京近郊散策（一）』昭和８年

戦火を越えて

太平洋戦争勃発の翌年、昭和 17 年１月の「短歌研究」誌は当時の代表的歌人による「宣戦の詔勅を拝して」の作品を特集、日本文学報国会が結成され、作歌の自由が奪われていきました。

日中戦争中終始戦争賛美の歌がなかった土屋文明が文学報告会の短歌部会幹事長になりますが、文明は太平洋戦争中にも優しく鳥を詠っています。

夜々の梟も今思ひがなしあらはなる臥所に育ちたりけり　『少安集』昭和 18 年

文明は終戦時、群馬県吾妻川渓谷の山村に疎開していました。杉浦明平はこの疎開が文明に「日本の自然と風土の底深くから抒情を汲み上げさせることになった」と書いています。（「土屋文明論」『現代短歌大系２』三一書房）

鳥籠に寄り立つ人の父を見る萬の戦死者の親かくありや　土屋文明『山下水』昭和 23 年

戦死せる人の馴らしし斑鳩の声鳴く村に吾は住みつく　同

斑鳩はイカルで、シメに似ていて少し大きく、頭が黒い留鳥で、秋冬には「キコキコキー」とよくさえずり、朗らかな鳴声が村中に響き渡って村の平和がしみじみとかみしめられたことでしょう。

斎藤茂吉は昭和 20 年４月郷里山形県に疎開し、終戦を迎えました。「多くの戦争詠によって戦意高揚に協力したかれにとって、戦後の戦争責任追及は、さながら針のむしろにある思いだった」（大岡信『第十　折々の歌』）と言われますが、一方「敗戦によって茂吉は彼の生涯における最高の境地に到りつく」（『現代短歌大系１』上田三四二「解説」）のでした。この敗戦による衝撃を和らげたものが、茂吉を幼年時代に育んだ蔵王や最上川など生国の風土でした。昭和 24 年刊の『白き山』には多くの鳥が詠われており、茂吉に故里の自然は「ふかい詠嘆を湛えた命の歌」（上田三四二）を生み出すのに幸いしました。

黒鶫来鳴く春べとなりにけり楽しきかなやこの老い人も　斎藤茂吉『白き山』「蕗の薹」

最上川ながるるがうへにつらなめて鴈飛ぶころとなりにけるかも　同「大石田より」

黒鳥の鴉が啼けばおのづからほかの鳥啼く春にはなりぬ　同「黒どり」

会津八一は昭和20年４月東京で戦災にあい、新潟県北蒲原郡中條町に疎開し、ある観音堂で終戦を迎えました。八一は茂吉とは対照的に「全き荒涼と孤独のうちにあたらしい時代を迎え」（『現代短歌大系１』上田三四二「解説」）ました。

それは終戦の一か月前、生涯家庭をもたなかった病身の八一を献身的に支えた養女きい子が、八一の懸命な看護もむなしく34歳で肺患でひっそりと息を引きとったからです。

昭和20年８月、八一はきい子を追悼する詞書を付して「山鳩」21首、「観音堂」10首を作りました。（『寒燈集』昭和22年　所収）

やまばとのとよもすやどのしづもりになれはもいくかねむるがごとくに　会津八一「山鳩」

あいしれるひとなきさとにやみふしていくひききけむやまばとのこゑ　同

戦後を生きる

昭和20年、窪田空穂は数え年69歳、長野県の現在の松本市の生家に疎開し、夏に軽井沢の別荘に移って終戦を迎えました。

暗みゆく林の空に一つゐて聲さまよひて黒つぐみ鳴く　窪田空穂『冬木原』昭和20年

大陸の戦地から帰らぬ消息不明の次男茂二郎を思う心がクロツグミの鳴声に乗り移って痛切です。

人情の歌人であり同時に自然観賞の歌人と言われた空穂は、庭の子雀にやさしい目を注ぎます。

子雀の集う七羽のいといたく悸えつつ食むあはれ粟の実　窪田空穂『丘陵地』昭和32年

同じ巣に生まれ出でたる子雀か来たると去ると七羽離れず　同

宮柊二は白秋の門に入り昭和14年に召集で入隊し、中國山西省各地で転戦、壮絶な生死をかけた戦いの体験を歌集『山西省』（昭和24年）に詠んでいます。その柊二の胸には戦後長く黒い鴉が住みつき、その声は鋭く突き刺ささりますが、安らぎをくれる鳥もいて、鳥の声に極めて敏感です。

わが胸に住む兇暴の鴉らが西に東に漂泊ひて鳴く　宮柊二『挽歌』昭和26年「するどき音」

何に拠る子が行末とこだはれど梟鳴けば心は和ぎぬ　同「ハイネの如く」

とほくする山鳩のこゑ戦争を憎める遂のこの寂しさや　同『多く夜の歌』昭和37年

「多感な詩人」といわれる木俣修は戦時下にあって白鷺を美しく歌い上げています。

雪原の真日のあかりに舞ひいでて白鷺の群かがやきにけり　木俣修『高志』昭和17年

戦後木俣修は、昭和25年病死した愛児高志の入院中に鳥に託して深い親心を詠みました。

霜の夜のあかときにゆく鳥の音の世田谷すぎていづくにむかふ　『落葉の章』昭和30年

とほどほに冬の小鳥の啼くときは家を恋ひいふ病む幼子は　同

昭和20年に長野県に疎開した斎藤史は、昭和28年刊の『うたのゆくへ』の「後記」に「二十代に二・二六事件を身近く視た眼に敗戦を眺め、もう四十の年齢も過ぎました」、なを今、信州に住み自分の歌が写生風一途にならず、「自然の中から人間の中から、抽き出すものを求めて居ります」と書いています。ちなみに、史の父は二・二六事件に連座した齋藤瀏。確かに次のカモと思われる水鳥の歌には華があり、エロティシズムさえ漂わせています。

水鳥の胸におされてひそやかにもり上がるとき水は輝ふ　齋藤史『うたのゆくへ』昭和28年

胸のまろみに水かるく押してゆく鳥も押されて揺るる水もおもむろ　同

復興と安保のはざまで

近藤芳美の昭和23年刊の歌集『埃吹く街』ではカモメが復興する街を象徴しています。

むらがりてたゆたふ鴎窓に見え今日も朝より眼は充血す　近藤芳美『埃吹く街』「あれくれ」

鴎らは常に海より漂ひて黄色き霧は街の上に立つ　同「三月詠」

近藤芳美は昭和35年秋に旧ソ連邦を訪れ、ウクライナのキーウで「ナチの呪詛ここも新し死者のための炎よ秋の陽の丘に澄む」（『異邦者』昭和39年刊「キエフ秋日」）と詠み、同時に空渡る鳥に平和

の願いを込めた歌を遺しています。

車輪船河ひたひたと下りつつ鶴かと思う空わたる鳥　近藤芳美「キエフ秋日」昭和35年

スターリンの死は昭和28年（1953）で、昭和31年にはハンガリー事件が起こり世界に衝撃を与えました。この状況の中で戦後前衛短歌運動の旗手岡井隆の暗喩を駆使した歌が注目されました。

帝国の黄昏　無辜（むこ）の白鳥を追いて北方の沼鎖（とざ）さしむ　岡井隆『土地よ、痛みを負え』昭和36年

渤海のかなた瀕死の白鳥を呼び出しており電話口まで　同

昭和30年、日本はいわゆる「神武景気」で、昭和31年度の経済白書は「もはや戦後ではない」と宣言、一方砂川闘争など米軍基地反対の運動が始まり、60年安保闘争へと続きました。

戦前、治安維持法で夫妻とも検挙されたプロレタリア歌人坪野哲久と山田あきはともに山鳩の声を聞きつつこの状況に対峙しました。

缺落（けつらく）のうずきもてれば山鳩の聲鳴くときに涙ほとびる　坪野哲久『想去想来歌篇』昭和44年

死は一つけんめいの死をぞこいねがうわが地獄胸山鳩鳴けり　山田あき『山河無限』昭和52年

前川佐美雄について、評論家桶谷英昭は「茂吉のように堂々と戦争吟を歌わなかった」前川の戦後の歌には「茂吉のような号泣はきこえない」が「哀しみは氏にとっても充分に切実なのだ」と書いています。（『現代短歌大系３』「前川佐美雄論」）

とぶ鳥もけもののごとく草潜（くぐ）りはしるときあり春のをはりは　『積日』昭和22年

前川佐美雄は茂吉と同様に多くの鳥を詠っており、その歌には鳥への深い愛惜に加えて柔らかなアイロニーが感じられます。昭和46年刊の歌集『白木黒木』より三首挙げます。

魚は上がり鳥は落つるもなどてこの秋を帰らず病む鳥の多き　前川佐美雄「冬の幻」昭和41年

霞網かくせるを雀ら知りをれば日暮れの藪にやかましく鳴く　「残亡抄」昭和41年

藪のなかかすみ網かくす日暮れがた萬の雀（すずめ）が盲目になる　同

霞網猟は昭和22年に一応禁止されましたが、守られず、昭和38年に鳥獣保護法が改正されますが、その後も密猟は続きました。

高度成長の蔭で

昭和26年吉野の山に戻り林業を継いだ前登志夫の第一歌集『子午線の繭』（昭和39年刊）には多くの鳥が前登志夫の世界、吉野の山を飛んで私たちを魅了します。

しろき朝のわが変身を叫びつつこのはるけさに墨（すみ）縄をひく鳥　前登志夫『子午線の繭』

しかし本歌集の「候鳥記」には「帰ってくるのではない。つぐみは存在を移すのみ―」の言葉が付されてツグミが詠われています。

踏みしだくふかきこの晝血を噴ける樹木の空につぐみ鳥来る　前登志夫『子午線の繭』

血のにじむ空行く細き嘴（はし）なれや愛憐の果をのこぎり叫ぶ　同

死匂ふ紅葉の渓に下りゆかむ鶫（つぐみ）の飢ゑは華やぎにつつ　同

前登志夫は自著『吉野日記』（角川書店）に「燕も、ぜんまいも、そして夜空を鳴いてわたる時鳥も、わたしとおなじ所に生きる場所を共有している。それだけのことが大事なことのようにおもわれてならない」と書いています。しかしツグミには吉野に帰る場所はなく「候鳥記」はまさにツグミの鎮魂の歌です。

かつて篠田正弘は「寺山修司の出現のインパクトは、彼の育った風土が私たちの忘却した前近代であることであり、その土地に純粋培養されることによって生まれた異形のすがたである」（『現代短歌大系９』「寺山修司論」）と述べましたが、寺山修司は肉親の死を通して鳥の実存に迫ります。

さむきわが射程のなかにさだまりし屋根の雀は母かもしれぬ　寺山修司『空には本』昭和33年

わが撃ちし鳥は拾わで帰るなりもはや飛ばざるものは妬まぬ　同『血と麦』昭和36年

亡き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり　同『田園に死す』昭和41年

安永蕗子は鳥の小さな存在を凝視してそのいのちを蘇らせています。

悲しきはかへりみるなと岸壁をつづき離るる海のからすも　安永蕗子『魚愁』昭和37年

輝きて町のま上の空に来る必らず聖き鳩と思（も）は

ねど　同

垣間見しものにあれども脚あげて雲雀はあるく菜の花畑　『草炎』昭和45年

石川不二子は昭和31年東京農工大卒業後、高校教師を経て、昭和35年夫と学生時代の仲間たちと共に島根県の開拓地農場に入植、５人の子供の母として農と野の生きものたちを詠い、生活の中にヒバリやキジを解き放ちました。

雲雀啼き雉啼きやまず石塚の蛇も目覚めてゐるにかあらむ　石川不二子『円型花壇』昭和33年以後「金色の目」

降らばまた雪とならむか夕雲雀叫喚のごとひとときはげし　同「春雪」

ひそやかに雲雀が砂を浴びゐたり子を泣かせ来し夕畑道　同「煙草の花」

馬場あき子が詠んだ鳥は様々な相貌をもって現れ、私たち野鳥観察者を沈黙に追いやります。

さがしいし鷹は秩父嶺碧天の冬をかなしみ啼きいたりけ　馬場あき子『ふぶき浜』昭和56年」

年を経し鴉に吹きて春の風さびしく太き声に啼かしむ　『晩花』昭和60年

わたり来てひと夜を啼きし青葉木菟（あおばずく）二夜は遠く啼きて今日なし　『葡萄唐草』昭和60年

これら馬場あき子の昭和の歌にはすでに平成以後の鳥たちの運命を見すえた短歌の力が感じられます。（ためさだ　さだと　さいたま市図書館友の会）